

「大学教員」イメージの考察

——『恐るべきお子さま大学生たち』・『水古風（ミズコフ）』・『学生レポート』にみる——

茨 木 正 治

I はじめに

大学が置かれている環境は、年々閉塞状況が高まりつつある。メディアが、「大学改革」を取り上げない日はないといってもよい。

しかしながら、「改革」が誰にとつて何をどのような効果をもたらしているのか（目的としているのか）という点については、十分には語られていない。むしろ、そうしたことは「既に終わったこと」として、言外に捨てられ、内実のわからない曖昧模糊としたシンボルとして提示され、実際に「改革」が進行してしま¹⁾う。内実を示さない（示そうとしない）がゆえに、背後の資源の格差を隠蔽しつつ暗示的に表現するから、シンボルとして機能しているともいえる。たとえば、「大学改革」がシンボルとして市民権を得ると、はじめに「変革」ありきとなつて、その「改革」の中身を問うことは「旧守派」とみなされる²⁾。ここに排除の論理が作用し、同時に「改革」派の統合が加速される。

ところで「大学改革」はどこから発せられたのか。「少子化」による志願者・入学者の減少が外圧となり、「経営

の健全化」が問われることになったことは論をまたない。「改革」を志向する人々は、その「健全化」モデルを産業界に求めた。しかも、一九八〇年代以降政治・経済に顕著になった、「新自由主義」原理に基づく、「サービス産業」として大学を位置づけ、それに従った「改革」を性急に行った。そうした「改革」は、多元的な社会観を謳っているはずの現代社会のなかで、あたかも大学の延長上には企業社会しかないかのような、一元的な社会観に基づいていた。⁽³⁾

この小論では、こうした「改革」の内実をより明らかにしたいと考える。しかし、「大学改革」とその状況把握には膨大な研究領域が必要とされ、論者の手には余るものである。では、どのようにアプローチしていったらよいか。ここでは、「大学改革」の一部分をなす「教員」像への視点を、以下で述べる素材をテキストに考察を試みる。

ところで、「健全化」を目的とした「改革」モデルは、換言すれば、功利・実用を重視する「消費者―生産者」モデルであった。財・サーヴィスと「教育内容」とを同一視し、この財・サーヴィスの関係から、教員―学生関係を構築しようとするものである。こうした意識・「理論」から具現化される関係を「教員」イメージの中に見出したのが、以下で検討するピーター・サックス（後藤将之訳）『恐るべきお子さま大学生たち』（草思社、二〇〇〇年）であった。他方、従来の「大学」の求めた「教員」イメージを学問それ自体を自己目的とする「永遠の学生」と規定し、彼らと学生との関係を端的に描いた漫画、『水古風（ミズコフ）』その四「永遠の学生」（『ビッグコミックオリジナル』六二六号、一九九五年一月二〇日号、小学館、所収）を紹介し、比較検討した。

この二つの資料をもとに、学生にレポートを提出させた。上記の二つの作品は、メディアを紹介した「送り手」ないし「メッセージ」の分析対象であった。これに対して、この「送り手」ないし「メッセージ」を現実の学生はどのように認識し態度を構成しているのかという、「受け手」ないし「受け手の効果」といった視点からの要素を加味したのが「学生レポート」である。この「学生レポート」の内容を分析し、「大学」「教員」「学生」のイメージが現

実とどのように差異があるのか、メディア情報としての「大学」についてどのような考えをもっているのかを再構築した。これは、論者が担当した演習科目に受講した学生一三人に、演習のレポート課題として当該二作品を素材の一部として提示して論述させたものである。もつとも、演習科目の課題はより包括的なものであったこともあり、彼らのテーマは「教員」に限定されてはいない。したがって、この小論で引用するときには、彼らのコンテキストを十分考慮して扱った。また、引用の際には、彼ら一人一人に許諾を得ているのはいうまでもない。

II 『恐るべきお子さま大学生たち』

本書は、ジャーナリズムの世界で実績を積んだ著者が、「高邁な理想」を掲げて大学講師になって、教壇に立つ。そこで「カルチャーショック」を経験しつつも「テニユア」（大学における終身身分保証）を求めて適応していく模様を綴ったものである。彼が勤めている大学（ザ・カレッジ）はいわゆる「コンビニ大学」、つまり大衆向け高等教育の場、であった。新聞記者としての「現実社会の」経験を、しかも自分にとって「天職」であった職業の経験を語ることに彼は何の不安ももってはいなかった。ところが、講義初日に、野球帽を逆さにかぶり軽蔑と退屈の表情を浮かべ「なんか俺に面白いこと言ってみな」と言っているかのような態度を示した男子学生に遭遇し、「高邁な理想」はもうくも崩壊する。実際の「大学」は、「テニユア」を求めて汲々とする教員と、「ハイパー・コンシューマリズム」（徹底した消費主義）によって、消費者メンタリティにどっぷりと浸かった学生たちからなっている「社会」であった。

象徴的な例として、「もう大人なんだぞ」という章をあげてみよう。ここでは、いわゆる「学生」⁵⁾による「教員評価」⁶⁾の顛末を戯画化（事実を淡々と語っているにもかかわらず）している。この章は、学校への交通手段を失った

学生のために自分の車を「動員」させられる夢を見たところから始まる。その理由を問うと、所属学科主任が次のように言う。「それをしないと学生が大学に来なくなる」。彼は、この夢を「ザ・カレッジ」に巣食う「世話焼き文化」の象徴と述べている。

この「世話焼き文化」の圧力が、「授業評価」として表れる。著者は「ザ・カレッジ」二年目を迎え、授業を工夫し、評価も緩め、自分なりの自信をもって授業に臨んだ。ある日退屈で不機嫌そうな学生の態度をとがめると、その学生は教室を出て行った。この後、学生からの「授業評価」結果（採点が厳しい）「がみがみ叱るな」「あいつをものすごく怒らせないとクラスを出てもいられない」等々を知り、きわめて厳しいことに著者は愕然とする。それは「テニユア」獲得はおろか、次年度の契約更新にも大きく差し障るものであった。学部の教授会と「大委員会」（教員評価のために委員会）において、著者は苦しい弁明を余儀なくされる。その結果、辛うじて次年度の更新が認められた。著者はこの後、自分の講義の姿勢の根本的な見直しを迫られ、ついには「お砂場実験」と称する学生への徹底した迎合と服従に終始した授業の実践にいたる。

ここには、「世話焼き文化」が、教員も学生ともに浸透しており、筆者が描く「大学」イメージがもうくも崩れていく様子が淡々と書かれている。「テニユア」への昇進どころか「解雇」の恐怖まで味わった「学生の授業評価」の「異常さ」を中心に、「世話焼き文化」の根底にある、「学生消費者（サービス享受者）主義」および「市場原理」（教育における教員と学生の関係も「商品」になってしまう）を自然と想像させるものである。

また、章の見出し「もう大人なんだぞ」はアイロニーを含んでいる。この言説は、「普通は」教員が学生に対し、彼らのわがままや、自分勝手さを叱責するために使うものであつて、「大人社会」のルールを学ぶべく、学生に他者との係わり合いや、他者を尊重することをわかってもらうために使われる言説である。ところが、この「もう大人なんだぞ」という言説は、「学生」から教員に投げかけられたものである（九六頁）。すなわち、上述したトピック

や、自由回答の「落としてしまえ」という表現が二度登場することからわかるように、この「ザ・カレッジ」において「生殺与奪の権限」は教員ではなく「学生」にある。「世話焼き文化」に基づく「社会」で適応する（「社会化」する）ためには、俺たち学生の機嫌を損ねてはいけない、ということをや暗に示している。学生たちが、こうした権力関係を十分に自覚しているかは、この章では明らかにはされていない。しかしながら、「世話焼き文化」が態度として具現化されていれば、学生にとってその根拠を感じ取るにはたいした時間はかからないであろう。

Ⅲ 「水古風（ミズコフ）」その四「永遠の学生」

日本の大学で文学を教えるイスラエル人ミズコフが狂言回しとなって、大学教員の中に日本の心を見出ししていく。今回（「その四」）では、学生にとって「楽勝講義」である勝谷教授の講義にミズコフは着目する。勝谷教授は、講義中に面白さを見つけてひとり悦に入ってしまう。そうした勝谷教授の姿に、学び続ける「永遠の学生」をミズコフはみる。ミズコフはそうした「永遠の学生」を「自在な心をもつ趣味人」とし、学び続ける教師に学生がついていくことが「学ぶ」ことであるとする。ミズコフは、日本文化を考えたときのキーワードとして「遊び」を位置付け、「学び」もそのひとつであるとし、勝谷教授の講義を受講することを学生たちに勧める。閑古鳥が鳴いていた勝谷教授の講義に多くの学生が押し寄せ、彼（勝谷教授）は驚きつつ、いつもの調子で講義を進めていくところまでこの漫画は終わる。

ミズコフは、学生との語り合い（芝生で車座になって語り合うというこれ自体もステレオタイプの表現ではあるが、おそらく「演習」におけるシーンなのだろう）において、次のように言う。「学ぶというこの本当の意味は、師が弟子に学んでもらうのではなく、学び続ける師に、弟子がついてゆくことなのです。（中略）私があなた達に

望むことは、すぐれた学生になることではなく、優れた講義がわかる人になって欲しいということです。学び続ける真の学生を師として尊敬してください。この語りは、三頁七コマにわたり、途中に勝谷教授の講義風景が挿入される。映像に置き換えれば、ミズコフがナレーションをして、勝谷教授の講義映像を流しているシーンをはさんで再びミズコフの「演習」風景の描写になるところである。

この勝谷教授のような講義スタイルを「日本の心」とすることに同意しがたい。こうした「メタ知識」の伝達は近代以前の社会にはどこでもみられる。したがって、いわゆる日本の芸事・技術における師弟関係に類推するだけでは、この漫画はきわめて凡庸な作品であると言わざるを得ない。しかし、「永遠の学生」という「学問」への姿勢、知識の伝達にとどまらない「それ自体自己目的的な行為としての学問追求」、「学ぶことの楽しさ・喜び」というものが、メタ知識レベルのものであることを再認識することをこの漫画が意味しているとすればどうであろうか。つまり、われわれは、はたしてこうしたメタ知識の伝達の可能性を想定しているだろうか、と問うことが今求められているとすれば、必ずしも凡庸な作品ではないであろう。

IV 「学生レポート」にみる

提出数一三枚中、この『恐るべきお子様大学生たち』と『ミズコフ』をテーマにしたのは一一枚（八四・六パーセント）であった。演習素材として、前出の二つが比較の後半に扱ったため、親近効果が出たと思われる。

テーマの詳細をみると、複数のテーマを一つのレポートで扱っており、全体数とは一致していない。とはいえ、大別して、(1)「大学にきた目的」（何のために来ているのか、何を学んだらよいかなど、八枚）、(2)「学生による教員評価」（三枚）、(3)「ミズコフ」に登場した勝谷教授」（三枚）(4)「その他」（三枚）の四つのカテゴリーになった。

「大学に來た目的」では、「よくわからない」と「単位取得、遊び、友人づくり」がほぼ四分六の割合であった。自分探しという従来の文脈からの学生意識が四割程度残っていたことは、正直言つて意外だった。「恐るべき……」で紹介されている学生像と自分達を重ね合わせているところが多く見られた。そして、その原因を自分達に帰属させているものが在学目的の不明を合わせて、このカテゴリーの九割近くにも及んだ。

この自己への原因帰属が、残りのカテゴリーにも影響を与えているようである。たとえば、「学生による教員評価」については、「こんなものあつていいのか」、「授業を聞いていない者や意欲のない者にまで教官を評価する権利が与えられる」ということは何ともおかしい話」、「学生が先生を評価するというのは、何かが根本的に違う」などと全てが非好意的な見解を示していた。「学問のための教員—学生」関係がきわめて茫洋とした形ではあるが価値判断の基準として残っているのではないかと考えられる。⁷⁾

また、「ミズコフ」に登場した勝谷教授」についても、「教員評価は（彼にとつて）有利」とする見方もあつたが、これも、「永遠の学生」を好意的に評価した結果であつて、皮肉ではない。むしろ「気持ち」が伝われば、（学び以外の目的の）学生の考え方も変わる」と勝谷教授にコミュニケーションを勧める言説もみられた（四枚）。たとえば、このような学生と教員とのコミュニケーションの必要性は、大学当局の経営責任を問う指摘や、「ザ・カレッジ」の学生たちと自らを同一視した言説のなかにも、他者依存的ではあるが（教員からの歩みよりを期待しているという点で）、「教える側も自信をもつて」「教師と学生とが切磋琢磨（？）して」などという形でみることができるといえる。⁸⁾

「その他」特筆すべきものとして、「学ぶ」ことは「永遠の学生」から学び取ることであり、それが実現されていないのは、大学側の「ビジネス主義」（過剰な商業主義）と学生側の「とりあえず大学に」志向にあるとしているレポートがあげられる。「真剣な学び（へ）の姿勢とそれを支える大学（の姿勢）」を求めるこのレポートには、問題の的確な把握がなされている。

レポートによる「学生を評価」という目的で行われた課題であったため、過度の読み込みには危険が伴う。「ミズコフ」に登場した勝谷教授に対する評価において、否定的な評価が全くなかったのは、教員の望む「正解」に対応しようとする結果であったともみられないこともない。これは、この課題自体への関心の喪失ということも考えられるからである。したがって、手放しではこの「レポート」結果を喜ぶわけにはいかない。しかし、「永遠の学生」に対する一種の「あこがれ」が彼らの中に存在していることは事実であり、たとえ決意表明であって、現実の説得力はもちえないとしても（あるいは他力本願であつても）、「大学」や「教員」、さらには「学問」に対するナイーブ（無垢）な感性の存在は確認できたのではないかと思われる^⑨。

V おわりに

「大学」イメージの考察にあたり、その方向性を整理するとともに、「恐るべき…」と『水古風』をテキストとした内容分析と、それらを素材にした「受け手」の効果分析を行なった。イメージの変容のなかに、日本社会が現在陥っている「改革」シンδροームが見えて、その根底には徹底した「市場主義」「商業主義」があらゆる分野において、無批判に適用されつつあるのではないかという問いが設定できた。この問いを以下の章において考察した。

内容分析からは、「恐るべき…」では、教員と学生の関係が振り子の揺れのごとく正反対に逆転した関係が、学生による教員評価」の経緯を通じてみられた。そこに、消費社会の「教育」領域への浸透の激しさを示唆しているように見えた。「恐るべき…」を現代日本の「過剰消費主義」の反映するものとするれば、『水古風』では、従来の大学でみられた教員像を「永遠の学生」として位置づけ、「大学における学問」「大学の存在意義」「学ぶ」ことそのものの意義を、従来の方向から勝谷教授という人物によって具現化していた。

学生による「レポート」の検討は、上記二資料をもとにした「効果」研究であった。彼らの文章から、『水古風』にみる「学び」に一定の理解を示していたものの、大学での目的を見いだせないことへの困惑、消費者意識の浸透が渾然一体となっていた。「目的意識」の喪失と一般にいわれる（メディアを介在して言及される）ことは、少し異なった結果がみられた。つまり、彼らは「学ぶ」ことそのものへの意識・欲求は枯渇してはいない、しかし、その表現形態を十分には持っていない（持つ必要に迫られていない）のではないか、ということが推測できた。

この小論では一部の問題提起にとどまっている。今後の課題としていくつかのものが想起できよう。

「送り手」「受け手」のコミュニケーション過程として、学生―教員・大学―社会関係を捉えた場合、現在の「消費者主義」の「大学」社会への適用は、あまりに一方的である。多様な社会からの「入力」が捨棄されている。なぜ「送り手」が企業社会一辺倒なのか、多元社会においてなぜ単一な社会モデルのみを採用するのか、モデルとしての「理念型」を構築するときに十分な吟味がなされているのか、「急務」「危機」「非常時」は政治言語化しやすいシンボルであることへの認識が我々をふくめてどのくらい認識されているのか、等々の問題が残されている。

また、以下の事柄についても考察に値すべきものと考ええる。メディアが描く「大学」（メディアの視点）や、政策過程における「大学」（政府、自治体、諸団体からみた「大学」政策など）（情報源、広義の「送り手」の視点）、さらには、『消費者主義』が大学以外の諸社会へ浸透していく過程などである。^⑩

最近の新聞で、ブックオフの隆盛の様子が語られていた。^⑪その中でブックオフの社長が次のように言う。「目利きが必要としない。単品より全体の流れだ」。我々が必要としているのはまさにこの「目利き」なのである。

（一）会議体の閉塞状況（なかなか議案が審議・採択されない）を打開するために、司会役（司祭役）の「リーダーシップ」を高めるべきであるという言説をよく耳にする。司会役の独断専行を「リーダーシップ」と勘違いして、フォロワーとなるべき人たちの

「おかみにおまかせ」意識に支えられて、権限を当該人物ないしその「なかよし集団」に集中させてしまう(註(10)参照)。「リーダーシップ」が、リーダーとフォロワーとの相互作用・対等な相互関係を前提として成り立つということがなかなか認識されない。特定集団への権限譲渡とかからの独断専行は、支配―被支配関係を正当化する権力関係とその行使にすぎない。したがって、こうした現象に「リーダーシップ」ということばが使われているときには注意が必要である。

(2) また、「はじめに改革ありき」という例については、第二次世界大戦後の日本における「教育の民主化」遂行をめぐる「形式主義」「権威主義」について言及した、マーク・ゲインの「ニッポン日記」に詳しい。

(3) 「教育」世界から「企業社会」への「主体的な」還流はほとんどみられない。ごくわずかの例として、『朝日新聞』掲載の投書がある(片岡万喜雄「教育と研修 企業人も学校から学んで」(『朝日新聞』二〇〇二年九月一日「私の視点サンデー」)。それによれば、学校における管理職の「外注」(「民間人校長登用制度」)にみられる企業からの流れに対し、学校内の民主的思考や手続を会社に注入すべきであると述べている。学校教育社会からその他の社会特に企業社会への還流が、メディアでとりあげられず、企業社会への「適応」例がほとんどであり、上述した投書の例はめつたにみられない。メディアの議題設定機能やフレーミング研究の点からも考慮すべき問題であろう。

学校社会から企業社会への還流が十分でないために、「社会人になること」≡「企業人になること」常態化してしまうことも、こうした企業社会一元化社会観を醸成させる原因にもなっていると思われる。

(4) 二〇〇二年度基礎演習Ⅰを受講した学生諸君に、この場を借りてお礼申し上げる。

(5) 「学生のために」「学生のことを第一に」といった言説が、「政治言語化」することは、低投票率で多数を確保した政権党の党首が「国民の支持を得て」といって、自分たちだけの利益になる政策を行うことを想起すれば十分であろう。

(6) ある大学の医学部で、教授以下全員に「人事考課」を設定した。その中に「学生による授業評価」だけでなく、授業時間数、論文数、「担当患者数」(一)が含まれていた。この考課によって賞与に影響が出るという。

(7) もっとも、「判断に迷うこと」や「遊び、単位取得」という回答が、強力な目的となつて表出される可能性はある。「学ぶ」ことの内容に彼らが眼を向けるときに、巷で吹き荒れている「実用主義」に影響されないとはいえない。メディアの影響についての質問はないので―実際言及もなかった―こうした回答や、予期される回答への影響は確定できない。

(8) 反面、学問以外の目的で大学に來ているものが大半であり、「水古風」みたいな(が望むような)学生はみたことがなく勝谷先

生の授業を受けている学生がほとんど」（単位をとるために出席しているの意）という指摘もある。

（9）そうした「感性」や「欲求」をどのように具現化していくかは別の問題である。

（10）『朝日新聞』（大阪統合版）二〇〇三年二月七日、「公立校どう変える——高津（こうづ）高・民間校長の波紋」を参照。

（11）『神奈川新聞』二〇〇三年二月五日「照明灯」。